

報告

「文体と規範、二律背反か ——ジル・フィリップ氏講演会報告」

根 木 昭 英

2018年6月2日、日本フランス語フランス文学会春季大会に合わせ、ローザンヌ大学のジル・フィリップ教授による学科講演会が開催された。フィリップ氏は、文学と言語学の二領域を横断しつつ、19、20世紀フランスの文体論を中心に多数の著作を発表している研究者である。代表的な著書として、19世紀末から戦間期にかけ、「文学性 (littérarité)」概念の出現と表裏をなすかたちで形成された、文学をめぐる言説全体の「文文化」を浮き彫りにした『主語、動詞、補語——フランス文学の文法的期間 (1890-1940)』(2002)¹⁾、フランス語の不完全性を主張するさまざまな言説を18世紀から3世紀にわたって追いかけて、それがフランス文学の優越、そして文学言語の自律性という教説に逆説的に寄与したさまを明らかにした『フランス語、最後の言語——ひとつの文学的係争の歴史』(2010)²⁾、フローベール以来、1960年代にいたる時代の諸作家(カミュやサルトル、さらにはコクトーら)が共有していた、唯一完璧な文体という古典主義的理想の存在に光を当てた『完璧な文体の夢』(2013)³⁾などがある。草稿研究にも精力的に取り組んでおり、プレイヤード叢書のデュラス全集監修のほか、バタイユ、カミュ、サルトル、ベルナノスらの全集、作品集編纂にも関わっている。現在は、ジュネのプレイヤード版を監修者として準備中である。

「文学的文体と言語的規範」(« Style littéraire et norme langagière »)と題された今回の講演は、フィリップ氏が現在準備中の著作の梗概を示すものであった。「文体」とは、そもそも何を意味するのであろうか。今日、それはしばしば、言語の一般的用法たる「規範⁴⁾」からの断絶と理解されるが、こうした考えは、文学が規範を保証する「よく書くこと (bien-écrire)」の場であるとの考えとは鋭い対立をなしている。フィリップ氏は、文体と規範と

の関係が、こうした対極的な見方のいずれとも異なっていることを示しつつ、文体をその変化のダイナミズムにおいて理解すべきことを主張する。

I.

講演は、理論的水準における考察と、歴史的観点からの個別研究を組み合わせるかたちで行われた。理論的考察である第一部では、数多くの文献の参照に基づいて、言語学分野における「規範」概念の回帰が示される。言語学において、50年ほど前まで、「規範」概念は、多様な言語実践への制約として否定的に扱われることが多かった。しかしそれ以後、とりわけ2000年ころを境として、「規範」は実践の安定化のために必要な現象と考えられるようになってきているという。フィリップ氏によれば、こうした規範概念の回帰は、言語学が対象とする領域の拡大にともない、規範の構築が「われわれ」、つまりは集合性を保証しているとの考えが受け入れられるようになってきた結果である。そして、こうした回帰の現象は、言語学の分野にかぎらず、より広範な言語科学全般においても生じているという。

しかしながら、こうした一般的動向のなかで、文体論の領域のみは例外であったとフィリップ氏は述べる。それは文学において、文体がなによりも「規範」の否定と考えられてきたためである。つまり、規範「にしたがって」書くのではなく、規範「とは異なる仕方」で書くことこそが、作家の独自性、ひいては「文学性」そのものを保証すると考えられてきたのである。

フィリップ氏が、文体の持つ歴史性への配慮を欠いた「共時的幻想 (illusion synchroniste)」と名付けて批判するのは、まさしくこうした考えである。一時点の静態面のみから文体を解明することは不可能であり、通時性を考慮に入れることによって始めて、そのダイナミズムにおいて文体を理解することが可能となる。そしてこのとき、文体と規範とを対置する考えそのものが、特定の時代に局限されるひとつのイデオロギーとして立ち現れてくるのだとフィリップ氏は言う。

II.

こうした見通しのもと、講演第二部では、1950年代に規範からの逸脱、つまり「悪く書くこと (mal-écrire)」が、それ自体文学的文体として規範化するという逆説的な事態が、具体的な作品の検討を通じて明らかにされてゆ

く。そこで示されるのは、文体のダイナミズムが、共時的断面における「規範からの逸脱」とはいかに異なったものであるかということである。最初に検討されるのはジュリアン・グラックの事例で、1951年の『シルトの岸辺』と1958年の『森のバルコニー』との比較から、前者から後者へかけ、グラックが文法的な規範から逸脱した文体、つまり「悪く書かれた」文体へと移行していることが示される。こうした例はグラックだけに見られるものではなく、早いところではカミュ（『異邦人』（1942））、ジュネ（編集者 M. バルブザによる『花のノートルダム』初版の改訂（1948））、そしてデュラス（『モデラート・カンタービレ』（1958）、『副領事』（1956））らの作品に関しても、同様の考察を導くことが可能である。これらの作品には、構文的観点からしても、テキスト構成の観点からしても、文体的「歪み（gauchissement）」への顕著な傾向——たとえば、『モデラート・カンタービレ』に見られる「*Modéré et chantant, dit l'enfant totalement en allé où ?*⁵⁾」といった文構成、あるいは『花のノートルダム』改訂版における接続詞の省略——が見られるのであり、このことは、「歪み」が、規範との断絶であったというよりは、「悪く書く」という新たな規範への集合的参与の過程であったことを物語っているのである。ドゴール（『大戦回想録』）のあまりに端正な文体に対する批評家の揶揄（バルト）や、この世代に属する作家たちがひとしく「悪文」家バタイユに魅了されたという事実もまた、こうした新たなパラダイムへの移行と符合している。

このように、規範と文体との関係が単なる対立関係としては捉えられないとすれば、では、正確には両者の関係をどのように考えるべきであろうか。一言でいえば、ある「時代の文体」とその「時代の規範」というのは別のものではなく、同一の事象を対立する観点から捉えたものだ、というのがその答えとなろう。フィリップ氏の表現をそのまま用いるならば、同一の対象に関して、「文体は通時態において分離する（séparer en diachronie）一方、規範は共時態において集合させる（rassembler en synchronie）」。⁶⁾ 難解であるが、これは、作家が過去のものとなったと感じられる書き方（講演の例でいうならば端正に、「よく書く」こと）から身を引き離すことによって独自の「文体」を確立しようとする過程は、ある時点における集団の言語使用として見れば、そうした新たな書き方（ここでは「歪んだ」仕方で「悪く書く」こと）が「規範」として集合的に確立される、ただひとつの過程にほかならない、ということであろう。文体をその歴史的次元をも含めて考察することによって、文体と規範との一見二項対立的な構図の背後に、両者を含みこむ

弁証法運動ともいうべきものが立ち現れてくるのである。

こうした統一的運動があるとするれば、文学と文体論もまた規範の回帰と無縁ではありえないことが最後に指摘され、講演は終了となった。続く質疑では、講演では取り上げられなかった時代の事例や、「規範」形成のあり方などについて会場から多くの質問が挙がり、予定時間を超過するほどの活発な議論が交わされた。

膨大なレフェランスに基づいて数十年にわたる言語史、文学史を俯瞰し、そこから特定の時代に内面化されていたドクサの輪郭を浮かび上がらせる今回の講演のスタイルは、これまでのフィリップ氏の著作と共通するものである。だが、そこからさらに、文体を変化の相のもとに説明する一般理論ともいうべきものが遠望されているところに、本講演の特徴があったと言えるか。講演会前後の打ち合わせでフィリップ氏は、この著作の完成にはさらに数年かかると仰っておられ、また、本講演で示された諸論点にはまだ整理の余地があると考えておられるようでもあった。刊行予定の著作で、今回かなり凝縮されたかたちで語られた考察がどのように展開されることになるのか、刊行が楽しみに待たれるところである。

報告の最後に、今回の招聘にご協力いただいた学会関係者のみなさま、学会誌『Littera』関係者のみなさま、そして学部・学科関係者のみなさまにあらためて深謝申し上げます。

注

- 1) Gilles Philippe, *Sujet, verbe, complément. Le moment grammatical de la littérature française (1890-1940)*, Gallimard, 2002
- 2) *Le Français, dernière des langues. Un procès littéraire*, PUF, 2010. アカデミー・フランセーズ、エミール・ファゲ受賞。
- 3) *Le Rêve du style parfait*, PUF, 2013
- 4) あとで見るように、「文体」概念とおなじく「規範」概念の意味も、講演のなかで明確化されてゆく。フィリップ氏はさしあたって、F. エルゴルスキーのモデルに依拠しつつ、「規範」概念を(1)多くの話者において観察可能な「通常の (normal)」用法、(2)つねに用いられるわけではないが典型的性格を持つ「規範的 (normatif)」用法、そして、言説の種類に依存し定義困難であるが、文が「うまく書かれている (bien-écrit)」、つまりは「鈍重 (lourd) でない」ことを示す「原器となる規範 (norme-étalon)」

「文体と規範、二律背反かージル・フィリップ氏講演会報告」

の三つに分けている。フィリップ氏が出発点とするのは、おもとして第三の意味における「規範」である。

- 5) Marguerite Duras, *Œuvres complètes*, t. I, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 2011, p. 1207.